



## 今日の裏方 TODAY'S STAFF

1. 名前
2. 私のお仕事
3. 観客へのメッセージ



1. 宮崎岳史  
Takefumi MIYAZAKI



1. 桜木 彩佳  
Ayaka Sakuragi



1. 小林野渉  
kobayashi noa

- |                                  |                                  |                                     |
|----------------------------------|----------------------------------|-------------------------------------|
| 2. ポーナストラックのスタッフ                 | 2. BONUS TRACK 運営                | 2. 編集者                              |
| 3. 作ることを楽しめる催しを色々準備中◎ふらりと遊びにきてね! | 3. 展示や公演のほか、マルシェや美味しいキッチンもお楽しみに! | 3. 今年は BONUS TRACK に新しいギャラリーが OPEN! |

ゲスト副編集長  
田村真弓

## 明日のSIPF

<p>10:00-11:00 朝ごはんトーク④ @ 下北沢アレイホール 『白い牙』を上演したドラク劇場のメンバーをお招きし、創作の背景や上演に込めた思いをお聞きます。</p>	<p>14:30-14:50 ミハ・アルフ 『シェフのミツツィ』 @ BONUS TRACK GALLERY 2</p>	<p>15:00-16:15 @スズナリ 『もの』のかげやさん (タングラム・コレクティブ) 『て』のかげやさん (ドリユー・コルビー)</p>
<p>11:00-11:45 ガザの人形劇を支援する映像上映会 @ 下北沢アレイホール 国際人形劇連盟が立ち上げた募金キャンペーンです。以下の三作品を上演します。砂絵アニメーション「We truly deserve life!」(2025年) ドキュメンタリー「Everything That Is」(2025年) 人形劇映画「The Awakening」From Ground Zero プロジェクト (2024年)</p>	<p>11:00-17:00 @ BONUS TRACK BONUS TRACK 冬市 × 下北沢国際人形劇祭 下北沢の BONUS TRACK と下北沢国際人形劇祭のコラボレーション企画。SIPF 関連の展示やイベントも盛り沢山。第一回SIPFの映像上演もあります。</p>	<p>19:00-20:45 @スズナリ 『もの』のかげやさん (タングラム・コレクティブ) 『て』のかげやさん (ドリユー・コルビー)</p>

## BONUS TRACK 日程表

	2月21日(土)			2月22日(日)			2月23日(月・祝)			
	広場/HOUSE	GALLERY 2	シモキタ園芸部こや	広場/HOUSE	GALLERY 2	GALLERY 1	世田谷代田に基保幼稚園 ピアッツァ	広場/HOUSE	GALLERY 2	世田谷代田に基保幼稚園 ピアッツァ
11:00		第1回下北沢国際人形劇祭 アーカイブ展 SIPF DIGEST VIDEO 35分			第1回下北沢国際人形劇祭 アーカイブ展 SIPF DIGEST VIDEO 35分				第1回下北沢国際人形劇祭 アーカイブ展 SIPF DIGEST VIDEO 35分	
11:30	マーケット & SIPFキッチン			マーケット & SIPFキッチン			無料公演 マティア・ソル フェ 子ども・親子回 無料 40分	SIPFキッチン		無料公演 マティア・ソル フェ どなたでも回 無料 40分
12:00		全編上映 A 『STICKMAN(棒人間)』 45分 12:10~12:55						全編上映 E 『KAR』 60分 12:10~13:10		
12:30		SIPF DIGEST VIDEO 35分	ワークショップ 工藤夏海「ナチュラル・プ natural pupo 天然人形」 要予約 70分 13:00~14:10					SIPF DIGEST VIDEO 35分		
13:00	シンケ from アマラブ 11:00~17:00			シンケ from アマラブ 11:00~17:00		ワークショップ 工藤夏海「たこば!」 参加無料 (カンパ敬注) 予約不要 105分 13:00~14:45	タングラム・コレクティ ブによるオブジェクト 彫刻ワークショップ 有料 120分 要予約			
13:30					全編上映 C 『Kasperek and CO.』 40分 13:30~14:10					
14:00		パフォーマンス ミハ・アルフ 予約不要 20分 14:30~14:50			SIPF DIGEST VIDEO 35分					パフォーマンス 工藤夏海 『movante animo 〜まぶくをめでる〜』 無料 40分 予約不要 14:00~14:40
14:30										
15:00		SIPF DIGEST VIDEO 35分	ワークショップ 工藤夏海「ナチュラル・プ natural pupo 天然人形」 要予約 70分 16:00~16:10		全編上映 D 『進化恐怖症』 75分 15:30~16:45					
15:30										
16:00		全編上映 B 『犬の生活』 60分 16:00~17:00								
16:30										
17:00										

# 第2回下北沢国際人形劇祭 2026 DAILY JOURNAL

**DAY4**  
Wednesday 20,  
February,  
2026



下北沢国際  
人形劇祭

第2回下北沢国際人形劇祭(SIPF)、早くも3日目となりました。この日は特にイベントが盛りだくさん。10時から2日目に『EXIT』を上演したマティア・ソルツェをはじめとする DAMUZA+Fekete のメンバーたちから朝ごはんトーク②でお話を伺い、洋の東西を問わぬ伝統と革新の相克に関する白熱した議論のその熱気のままに、マティアが企画したガザの人形劇を支援する映像上映会に突入しました。続けてトーク②『アジア人形劇のラウンドテーブル』も行われます。カンパニー・サンジュ・ディーゼルによる美しくも悲しい人形劇公演『KAZU』は大盛況で、劇場の前にキャンセル待ちの長蛇の列ができました。そして16時と20時の上演のあいまに、ショート人形劇連続上演『第四回 インターナショナル・パペットスラム』第一夜も催されました。息つく間もなく駆け抜けたこの日、なにが起きていたのか、デイリージャーナル部員による劇評、イベントレポート、イラストでぜひお確かめください。

まだ眠りたくないとせがんだおとぎ話。親戚が語る調子のよいホラ話。友達の家で宝箱を覗き込むときの期待。大勢の観客を前にしながらも、語りは一貫して「他ならぬ

あなた」に向けられ、その親密さのなかでパペットたちと次々に出会う喜びが駆動していく。登場する約二十体のパペットは、頭部のみのもの、全身像、手によって補完されてはじめて成立するもの、丸められた紙のような即興的造形まで多様で、サイズも形態も統一されていない。そうした不均質な存在から、短い物語が断続的に立ち上がる。繰り返される「始まり」と「終わり」。ポクサー、マジシャン、バンドマン、子ども、老人、恐竜... 空へ、ベッドへと物語は跳躍し、ピアニストがリアルタイムで奏でる劇伴が間合いと緊張を編み上げる。メタ的なダイナミズムを孕みながら場面は移ろい、まだ言葉にならない気配が足元から立ち上がる。本当に重要なことは、一言目から語ることはできない。私とあなたのあいだに、まだ話されていない何かが残されているという感覚。やがて、KAZU のコスモが包み込んでいたのは、孤独と喪失の泉をたたえたひとつの惑星であり、これまでの物語はその周囲をめぐる衛星たちであったことに気づかされる。均質化されないパペットたちは、固有の傷たちが単一の形へと回収されることを拒む。

「あなたが眠れないときは、誰かの夢に登場しているとき。」一人間たちが KAZU の夢から目を覚ますとき、パペットたちは眠りにつく。終演後に舞台へ近づくと、その造形が雪のように溶けてしまいそうな繊細な質感で作られていることに気づき、驚嘆する。永遠には続かない時間。関係の儚さと脆さ。本作は、幸福の瞬間が必然的に終わりへ向かうことを示しながら、喪失にそっと寄り添う小さな「手当て」として、観客の心に佇む。  
前田斜め (デイリージャーナル編集部)



絵: Mayuky Kahn (デイリージャーナル編集部)

# メインプログラム MAIN PRO カズ KAZU

「眠れない時は誰かが夢で寝ているんだって」「死んだらあるところに行く　そこでは失くしたものが見つかる　10歳の時に失くしたミニカー、トランシーバー、鍵、ペンたち」

ウレタンフォームの柔らかな質感の人形たちが並べられる空間には、人形を製作している操演者とキーボードの前に座る演奏者。客席最前列中央には女の子の人形がひとり。開演すると女の子の人形にオオカミの仮面が被せられる。舞台を見つめる彼女の名前はルー。たくさんの人形を用いて手を変え品を変え語られる様々な人々の物語たちは全てルーに向けて語られるもので、我々観客はそれを覗いているに過ぎない。操演者がルーに呼びかける時、世界は2人だけのものになる。しかしまた物語が再開すると人形を介して語られる多くの他者の存在により世界は少しずつ広がり、私たち観客もそれを覗き見ることができるようになる。多くの人形を使い、様々な人生を語るという作品のスタイルの広がり、操演者がルーに語りかけることで提示される対象の狭まりの変化が鮮やかに感じられた。

死の香りがうっすら漂う舞台上において操られる人形たちは、それはそれは生き生きとした表情を見せる。くしゃくしゃにし

Humor can be understood as an excess, or as a controlled form of madness—a way of confronting grief. Yet an overflow of words and images, like those in a dream, can also become harmful, even taking the shape of psychosis. “it is said that you are in someone’s dream when you can’t sleep.” this is the opening line of kazu. On stage, there is one puppeteer who narrates, one performer who plays the piano and guitar tenderly, and countless soft puppets made of urethane foam and colored in warm tones. We are gradually drawn into kazu’s plastic dream world together with these puppets. Throughout the performance, he directs his narration to a life-sized puppet shaped like lou, his deceased lover. The puppet of lou sits in the center of the front row of the audience. “Thanks to video games, on average, ten-year-olds know ten different ways to kill. But do they know ten different ways to love?” kazu asks. He demonstrates his own “ways of loving” by recounting to lou—and, by extension, to us—a series of short and often strange episodes from the lives of various individuals and couples. Many of these stories end sadly, perhaps echoing the day at the hospital when lou was told she had



た紙に目をつけただけの簡易なオブジェクトでも瞬き一つが観客を惹きつけ、皺の一つ一つが照明によって立体感をもたらされる。この表情豊かな人形達とは反対に観客に背中を向けるルーは極めて人形的である。ルーの表情は我々には見えず、作品の終盤に舞台上に上げられた際もルーは動かない。他の可動域を持ち操演者によって生き生きとした表情を見せていた人形たちとルーは明らかに違うのだ。人間と非常に人間らしい人形たちと最後まで人形であるルー。この3者の存在が人形と人間の境界線を曖昧にし、我々を混乱させる。最後に舞台上からこちらを見るルーはこう語りかけ

little time left. This excess of words and images serves to console the sorrow of his lover; it was, and still is, his way of loving and surviving. Kazu tells us that he has bipolar disorder and takes medication so that he does not “fly.” and yet, in the form of a puppet, he does fly. He continues, “the problem is not that he flies, but that he doesn’t know how to land.” in fact, we come to understand that he lands through puppetry itself. The puppets on stage, as forms and as constraints, contain the boundless madness of language and render it inhabitable. Here, puppetry functions as a technique for holding the magic of madness within the framework of reason. Kazu also recounts how, in his studio, he sometimes notices small cuts on his hands without knowing how they appeared. On screen, his hands are projected and transform into the shape of a face, which says, “i don’t know why, but you don’t take care of me.” such immersion can inflict psychic damage. “you see, it wasn’t that easy,” kazu remarks. Puppetry as excess becomes both heartwarming but poignant wound and remedy. Kenyu paku (デイリージャーナル編集部)

ているようにも見える。「じゃああなたの人生は？」

宮原紗代 (デイリージャーナル編集部)



絵 :Mayuky Kahn(デイリージャーナル編集部)

Having seen a lot of Japanese traditional theatre, contemporary drama, and television shows, I felt that the performances at last night’s puppet slam were among the most honest, exuberantly expressive, and free that I have seen on any Japanese stages. Each act was inventive and surprising in its own way, and the performers fully present and concentrated. Their acting skills were supported by their focus on the objects at hand.

(Cudia Orenstein, Professor of Theater at Hunter College and the Graduate Center, City University of New York)

日本の伝統芸能、現代ドラマ、テレビ番組をたくさん鑑賞してきたが、昨晚のパペットスラムは、これまで観たどんな日本の舞台よりも最も誠実で、あふれんばかりの表現力にあふれ、自由なものだと感じた。一つ一つのパフォーマンスがそれぞれに独創的で驚きを与え、操演者はまさにそこにいて集中していた。彼らの演技力は手元のオブジェクトに集中することによって強められていた。

(クラウディア・オレンスティン NY 市立大学演劇学部教授)

まだ眠りたくないとせがんだおとぎ話。親戚が語る調子のよいホラ話。友達の家で宝箱を覗き込むときの期待。大勢の観客を前にしながらも、語りは一貫して「他ならぬあなた」に向けられ、その親密さのなかでパペットたちと次々に出会う喜びが駆動していく。登場する約二十体のパペットは、頭部のみのもの、全身像、手によって補完されてはじめて成立するもの、丸められた紙のような即興的造形まで多様で、サイズも形態も統一されていない。そうした不均質な存在から、短い物語が断続的に立ち上がる。繰り返される「始まり」と「終わり」。ボクサー、マジシャン、バンドマン、子ども、老人、恐竜 ... 空へ、ベッドへと物語は跳躍し、

## ガザの人形劇を支援する映像上映会

冒頭、この上映会の背景について企画者のマティヤ・ソルツェさんから説明がありました。彼は現在ガザの人々と作品を作る企画を進めており、現地での創作も考えているそうです。社会的・政治的な問題を観客に示すことも芸術家にとって重要な役割だと彼は語ります。一作目は、カナダの砂絵作家がガザの人形遣いの証言をアニメーション化した作品。砂で描かれた大きな左目から零れる涙が血へと変わり、砂で描かれた様々な風景が一瞬にして手で吹き飛ばされるさ

## インターナショナルパペットスラム

今年もお待ちかねインターナショナルパペットスラムが開催された。観客の「一瞬の楽しさも逃すまい」とする貪欲な高揚と混雑の渦のなかに幕が上がる。MC 魔女 (ゼロコ) の導きのもと、6組の出演者がパペットスラムのステージへ登場。角谷将視は丸めた紙たちを自由自在に変化させ、さらに観客のテンションを自分の隙もなく操り、大いに会場を沸かせた。森崎花はハローワークに翻弄されるクマの苦闘をリアリティ豊かに全身を駆使したコメディ作品に。山中将靖は影絵とパペットを架橋する実験的な試みを行い、若狭博子はシンプルな手袋のみで『赤ずきん』を演じ人々の想像力を解き放つ。梶野ひなこは彼女の詩世界についてオブジェクトと忍耐強くプレゼンテーションをする。青木直哉は、卓越したジャグリングの技術を発揮しつつ、人形性の要素と調和したピースに。そしてタイのター・レント・ショウは、底抜けのユーモアでこれ以上なく観客の盛り上がりを煽ったかと思えば、ざぶとん1枚の魅惑のシー・パラダイスを開園し、場を圧倒した。

もし現実のままならさに振り回され、不条理のピンタに立ち尽くすならば、まずはこのテーブル一つから、私たちのものにしてみようではないか。世界がどんな分断と混沌の中にあってもこの日私たちは共にテーブルの上の魔法を目撃した。パペットスラムはそんな勇氣と自立の精神を軽やかに手渡してくれる。

ピアニストがリアルタイムで奏でる劇伴が間合いと緊張を編み上げる。メタ的なダイナミズムを孕みながら場面は移ろい、まだ言葉にならない気配が足元から立ち上がる。本当に重要なことは、一言目から語ることはできない。私とあなたのあいだに、まだ話されていない何かが残されているという感覚。やがて、KAZU のコスモが包み込んでいたのは、孤独と喪失の泉をたたえたひとつの惑星であり、これまでの物語はその周囲をめぐる衛星たちであったことに気づかされる。均質化されないパペットたちは、固有の傷たちが単一の形へと回収されることを拒む。「あなたが眠れないときは、誰かの夢に登

## ガザの人形劇を支援する映像上映会

まが、私たちに見えない現地の苦しみや爆撃の惨状を想像する糸口となります。二作目と三作目では、避難テントで凧揚げをする子どもたちや、支援物資の缶で人形を作り人形劇を上演し続ける人形遣いの姿そのものが映し出されます。「彼らは破壊し、私たちは再び築く」。まず現実を知ることからしか全ては始まりません。21日までの連日午前中に無料上映があります。みなさまぜひご覧ください。

朴建雄 (デイリージャーナル編集部)

場しているとき。」一人間たちが KAZU の夢から目を覚ますとき、パペットたちは眠りにつく。終演後に舞台へ近づくと、その造形が雪のように溶けてしまいそうな繊細な質感で作られていることに気づき、驚嘆する。永遠には続かない時間。関係の儂さと脆さ。本作は、幸福の瞬間が必然的に終わりへ向かうことを示しながら、喪失にそっと寄り添う小さな「手当て」として、観客の心に佇む。

濱田明李 (デイリージャーナル編集部)

## ガザの人形劇を支援する映像上映会

## ガザの人形劇を支援する映像上映会



## アジア人形劇のラウンドテーブル

台湾の Flying Group Theater 劇団で活動、Close to YOU オブジェクトフェスティバルを開催していらしたペイユーさん、パントマイムやオブジェクトシアターの活動に加え、タイでパペットスラムを開催しているターさん、パペットパークというウェブサイトを開業し、日本現代人形劇の遍歴を記録している石井さん。このお三方のお話を伺った。ペイユーさんもターさんも作品創作だけでなく、観客や作り手の育成と作品創作の場の創出により現代人形劇界を盛り上げようとしている。特にタイのパペットスラムではアマチュアの参加者も作品を発表できるように「タイの人々に新しい体験を」と活動されているのが興味深い。両国とも伝統的な人形劇への助成は存在する一方、現代人形劇への保障は少なく苦戦しているようだ。パペットパークの情報量の多さに驚きつつ、日本で行われてきた多様な人形劇公演に、過去から現在への道のりを感じる。

宮原紗代 (デイリージャーナル編集部)



濱田明李 (デイリージャーナル編集部)